

續

ニールスの不思議な旅

セルマ・ラーゲルレーヴ作





セルマ・ラーゲルレーヴ作

ニルズの不思議な旅

学陽書房刊

昭和二十四年十二月十日 印刷
昭和二十四年十二月二十日 発行

続ニールスの不思議な旅

定 價 二〇〇円



訳 者 香川鉄藏・山室 静
佐々木基一

発行者 光 行 壽
東京都豊島区雑司ケ谷一ノ三九二

印刷人 大 芝 章 吾

印刷所 凸版印刷富士工場

東京都豊島区雑司ケ谷一ノ三九二

学 陽 書 房

振替 東京 84240

—(A207074)—

(横井製本)



目次

一	百姓のおばあさん	五
二	いっしょにつれて行って！	二四
三	大きな鳥の湖	三〇
	野鴨のヤツロ	三〇
	おとり鴨	三二
	排水問題	三七
四	珍らしい拾いもの	三九
五	カルルと芦毛の話	六六
	獵犬カルル	六六
	芦毛の逃亡	七五
	芦毛の死	八七



六 氷 解 け 九

七 洪 水 一〇七

ヘルスター入江の白鳥 一二三

八 水 の 精 一三八

水に浮ぶ都 一三八

ストックホルム 一三三

九 鶯のゴルゴ 一三四

アルペストルの谷 一三四

監 禁 一六五

鶯に乗って 一七一

十 森の中の日〔植樹祭〕 一七六

十一 山の小舎で 一八二

十二 ラブランドめざして 一八九

走 る 國 一八九



夢	一九一
十三 再 会	二〇〇
十四 南へ！ 南へ！	二〇五
旅の最初の日	二〇五
塔 の 上	二二二
十五 バタキイと共に	二二六
十六 小さい屋敷	二三八
十七 故郷をさして	二四七
海へ向う途中	二四七
ゴルゴのお使い	二五二
ヴェンメンヘーイに帰る	二五五
十八 父親の家で	二五六
十九 ニールスとがんの別れ	二七五



続ニールスの
不思議な旅



狐のする公

がいをねらって、しゅうねんぶかく、つきまとう悪
もの。



白鷺鳥のモルテン

ニールス少年を背中のにのせて、がいの群と旅をつづけ、さまざま
な冒険をする。



がいの隊長アツカ

年とつた、お婆さんのがいで、情ぶかく、勇氣があり、いろい
ろな危険も、うまくはすす。

クレメン

田舎音楽師。スカンセン公園の番人をしている時に
ニールスを買取ったお爺さん。

ゴルゴ

小さい時に両親をなくしてがんと一緒に育った鷲。
がんの群にはぐれたニールスを乗せ後を追かける。

オーサとマッツ

ニールスと一緒に鷲鳥番をしていた姉弟。家をとび
出した父をさがしまわっている。



これまでのあらすじ

スエーデンの南の村にニールスという、年は十四、お手つだいや勉強が大きいで乱暴で意地悪な少年がいた。ある春の朝、お父さんたちの留守の間に、勉強をほってウトウトと居眠りしていると、長持のふたが開いて奇妙な小びとが腰かけているのが目についた。ふしぎな魔法を知っているトムテだ。こいつを捕えたら面白いぞといきなり綱ですくった。ところが、トムテを綱から出そうとした時ガンーとニールスは壁に叩きつけられた。やがて気がついてみれば、ニールスはトムテの魔法で小さい一寸法師にされてしまっていた。『もう決していたずらしないからものと姿にかえして』と泣きべそをかきながらトムテを探したが、どこにも見当らない。雞も牛も猫も「良い氣味だ」と教えてくれない。しょんぼりと石垣の上にすわっていると、空を北へ北へとがんが飛んでゆく。そのうちお母さんが大事にしている白鷺鳥のモルテンが、がんにさそわれてすつと飛び立つた。あわててニールスがおさえようとしたが、鷺鳥は少年をのせたまま舞い上る。こうしてニールスはがんにまじって旅に出てしまった。途中、がんをねらっている狐のズル公に何度も追われたり、海に溺れそうになったり、七郎鼠に滅ぼされそうになった黒鼠を助けたり、情ぶかくちえのあるがんの隊長アツカや、モルテンとお互に助け合って旅をする間に、しだいに親切でりっぱな少年になってゆく。こうしてニールスはさまざまな危険な目にあったり、冒険をしながら北へ北へとがんと旅をつづける。やがて暖くなって南へかえる日を待ちながら……。そして、いつになったら、もとの人間にかえられるのか、なつかしい父母に会えるのやら……。

続 エールスの不思議な旅

一、百姓のおばあさん

日がくれてから、少年はモルテンとダンフィンとをつれて、夜のねぐらをさがしていた。

何よりもこまるのは、日が西にはいつてしまうと、モルテンとダンフィンがいねむりをはじめ、今にも地上におちそうになることである。目をさましている少年は、夜のせまるにつれて不安になってきた。「潮や沼が凍っている土地へ来たのは、とんだことだったねえ。これではどこからでも狐めがやってくる。よそはどこでも氷がとけてしまったのに、スモーランドは一ばん寒いところだから、まだ春にならないのだ。これではいい宿を見つけようもない！ いい場所をさがさないと夜中に狐がやってくるからね」と、いった。

四方八方ながめて見たがよいかくれ家がない。寒けはするし、暗くはなってくるし、おまけに霧雨がふっている。あたりはなんとなくぶ氣味になってきた。

そのうちにたよりの空明りも失せて、ほの暗い夜、に鷺鳥たちもとうとう眠たくなつたとき、ふと野中の一軒家に來あわせた。あれはてた家で、人が住んでいそうもない。煙突からは煙ものほらず、窓からもあかりがもれていない。家の中に人間のいるけはいがない。少年はその前に立つたとき、「こゝうなつてはしかたがない、とにかくこゝへはいるとしよう、これよりいいところは見つかりそうもないからなあ」と思つた。

やがて、その農家の裏手へおりた。モルテンとダンフィンとは、すぐにいい氣持でねむつてしまつたが、少年はどこか屋根のあるところはないかと見まわした。よく見ると、小さい家とおもつたのはまちがいで、母家のほかに厩うまやもあれば乾燥場もあるし、穀倉や、物置場や、家畜小舎がずらりとならんでいる。が、どれもこれもこわれていて、ひどくみすばらしい。壁をみれば苔こもがはえていて、今にも倒れそうである。屋根には大きな穴があんぐり口をあけているし、戸の蝶つがいはこわれてはすれそうになっている。ながいこと手入れもせずほつておいたものとみえる。そのうちに、少年は牛小舎を見つけた。鷺鳥たちを起してつれて行くと、さいわい戸はほんの立てつけてあるだけなので、わけなくあいた。これなら安心して眠れると思つてひと息ついた。ところが、戸がぎいとあくと、一びきの牝牛がほえだした。

「おばあさん！ お待ちしていましたよ、今夜はもう夕飯をいただけないかのおもひましてね」牛小舎がからでないので、少年はきもをつぶして入口にたちすくんでしまった。が、まもなく一ひきの牝牛とヒヨコが三四羽しかいないのを見て、また元氣づいた。「あわれな旅のものが、狐にも人間にもつかまらぬような宿をたずねているのです。ここは大丈夫でしょうか？」と少年がいうと、「大丈夫ともさ」と牝牛はこたえたが、なおも言葉をつづけて、「なるほど壁はひどくいたんでいるが、そこから狐が出はいりしたことはないし、この屋敷には百姓のおばあさんのほかだれもいないが、それにおばあさんは生きものなどつかまえるような人ではないからね。だが、お前さんがたは、いったいどなただね？」牝牛はもつとよく見ようとしてくびをかしげた。「ぼくはヴェンメンヘーイ生れのニールス・ホルゲッルソンというのですが、今はトムテにされているのです。つればぼくの家であつていた雄鷲鳥と、旅で道づれになつた灰いろ鷲鳥です」と少年はこたえた。「やあ、こんなめずらしいお客さんはこの小舎にはじめてだ。ようおいでた。が、じつをいうと、夕飯をもつてきてくれるご主人だつたら、なおよかつたのだよ」と、牝牛はいった。

やがて少年は、鷲鳥たちを牛小舎の右手につれて行つて、かいば桶の中に入れてやったところ、

じきにねいってしまった。じぶんもすぐに眠るつもりで、わらをつんで小さな寢床をつくった。ところが、となりでは牝牛がときもじつとしていないで、くびのくさをがちゃがちゃならす、足をどたばたやる、そしてべつおながすいたすいたとこぼしている。そのため少年はまんじりもしないで、わらの中に横になったまま、この間じゅうのいろんなことがらを思いうかべていた。

はじめに思いだしたのは、オーサとマツの姉弟に不意にであつたことだ。じぶんが火をつけたのだが、あの小さな掘立小舎ほつたてごはこの姉弟の家にかがいない。そういえばいつぞや、オーサとマツがちょうどあんな掘立小舎とヒースのはえた荒地のことを話したことがあつたが、あれから二人は生れた家をまた見にもどつたのだろう。が、せつかく來てみると、小舎はいつのまにかもえていた。……すると、この姉弟をとんだ目にあわせたものだと考えて、大そう悲しくなつた。またもとの人間にかえつたら、ここからおわびをしよう。

それから、思いは鳥のことになつたが、命を助けてくれたから、おかしらにえらばれると間もなく殺されてしまったノロ公の身の上になると、かわいそうで涙がにじんできた。

たつた二三日のあいだにすいぶんひどい目にあつたものだが、モルテンとダンフィンとが見つ

けてくれたのは、この上ないしあわせであつた。

雄鷲鳥の話によると、こうなのだ——が、んたちは親指君のすがたが見えないので、すぐと森じゅうの小鳥たちにゆくえをたずねた。そしてスモーランドの鳥たちがさらつて行つたとは聞いたものの、さてその鳥たちがどつちへ行つたかは、だれも知らなかった。そこで、できるだけはやく少年を見つけたために、アツカはが、んたちを二羽ずつに分けて、めいめいちがつた方面へさがしに行くように命じた。こうして二日のあいださがし廻つたのだけれど、少年の行方は少しもわからない。そこで、なおも方々をさがすことにして、みんなが最後におちあうさきは、西北スモーランドのまるで塔のようにけわしいタアベルイという山の上ということにきめて、みんなは一まずばらばらになつてさがしにでかけた。

白鷲鳥はみちづれにダンフィンをえらんだ。そしてこのふたりは、親指君の身をあんじながら、あちらこちらとたずねまわつた。そのうちに一本の樹の頂上にとまっていた鷲つぐみがおいおいないてゐるのを耳にした。

「だれだかすがたは見えなかったが、「鳥にさらわれた者」というやつにひやかされて、くやしう」と、言っている。そこでその鷲つぐみと話をしたところ鷲は「鳥にさらわれた者」というものの声

がした方角を教えてくれた。それから、ふたりは、なおも山鳩やら椋鳥やら雄鴨やらに出あつた。それらの鳥はくちぐちに、ちつぽけなやつが通つて歌のじゃまをして行つた。そして、そいつの名は「鳥にさらわれた者」「鳥の親玉につかまつた者」とかいつた、とおしえてくれた。こんなふうにして、ふたりはどうやら親指君のゆくえをつけて、とうとうスネルブー地方のヒースのはえている荒地までやつてきた。

こうして鷺鳥とダンフィン少年を見つけると、すぐにタアベルイ山へ行くために飛んできたのだ。でもタアベルイまではまだなかなかみちのりがある。そして山の頂上が見えぬうちに、もうとつぷりと暮れてしまつたのだ。

「あしたまでにタアベルイへ行けさえしたら大じょうぶ」と、少年は暖まろうとしてわらの中へもぐりとみながら考えていた。

牝牛はあいかわらず騒いでいたが、にわかに少年に話しかけた。「君らの一人はトムテだと言つていたようだが、もしほんとにそうなら、牝牛の世話ができるはずだ」いわれて少年が「何がなくって困っているの？」ときくと、牝牛は答えた。「何もかもないのさ。だれも乳をしぼつてくれないし、せわもしてくれない。桶の中にはちつとも夕飯のかいばがない。御主人は夕方こ

こへきてかたずけていたが、きぶんがわるくなつて家へ歸られたままなのだ」「ぼくはこんなちつぽけで力がないのだから、しょうがない。氣の毒だが、とても君のお役にはたちそうもないや」と少年がいうと、「ちつぽけだからといって力がないとは言わせないよ。だつてわしがこれまで聞いているトムテというのは、どれもこれもなかなか強くつて、車につんだ枯草をひくこともできれば、げんこで牛をうちこころしもしたそうだよ」と牝牛はいった。少年は思わすふきだした。「君が話に聞いているようなトムテとはちがうのだよ。でも、君のなわをといて、戸をあけてあげるから、出て行つて水をのんだらいいだろう。また僕は枯草おきばへ上つて、君に草をなげおろしてみるからね」と少年がいうと、牝牛はやや喜んだらしく、「そうしてくれればちつとは助かるね」と、いった。

そこで少年はそれとおりにして、牝牛のかいばおけの中に草を一ぱい入れてやった。「さあひと眠りできるぞ」と、少年はほつとした。ところがまだわらの中にもぐりこまぬうちに、またもや牝牛が話しかける。

「もう一つお願いできたらほんとうにありがたいのだが、どうだろう？」と牝牛はいった。「いや、もうとても。でも僕にもできそうなことならばね」と少年は念をおした。「それならばお頼